



愛知淑徳大学

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第20号

発行年月日：2005年9月30日
 〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
 Phone 0561-62-4111 EX 498
 FAX 0561-63-9308
 E-mail : igws @ asu.aasa.ac.jp

IGWS 第20号ニュースレターの目次

○ 映画上映と講演・トーク<映画表象とジェンダー>	1
○ 記念事業参加感想文	4
○ ジェンダーを意識せぬ世界	5
○ ジェンダーと ICT	6
○ IGWS (H17) 購入図書のご紹介	7
○ 学生サークルのご紹介	
○ お知らせ	
○ 2005年(H17)後期ジェンダー・女性学関連の授業開放講座	8

ジェンダー・女性学研究所は、1995年の開所から10年目を迎えました。学園100周年記念とあわせて、「映画表象とジェンダー」をテーマに映画上映と監督の講演・トークの記念事業を実施しました。以下はその概要です。

映画上映と講演・トーク<映画表象とジェンダー>

映画「おばあちゃんのガーデン」

映画の概要

ムラカミ・アサヨは、1924年、送られてきた写真だけで結婚相手を決める「写真婚」で広島県・尾道からカナダ・ブリティッシュコロンビア州の漁村に嫁いだ。しかし、写真の男性を好きになれず、金銭を支払い離婚し、自分で選んだ男性と結婚、8人の子どもをもうける。「おばあちゃんのガーデン」はその孫にあたるリンダ・オーハマ監督が混乱の時代と祖母の人生をたどったドキュメンタリー・ドラマである。

リンダは、祖母の100歳の誕生日と彼女が戦前に住んでいたスティープストンの家が歴史的家屋として認証されたことを記念して、この映画を撮り始めた。映画製作のためにアサヨから話をきくうち、アサヨは75年間誰にも見せたことがない1枚の写真を取り出した。そして、そこに写る2人の娘は自分の娘であり、関東大震災の後、夫はこの娘たち2人を連れて姿を消

してしまつたと説明する。リンダは日本に行って祖母の足跡を追ってみようと、母チズコと娘のケイトリンをともない来日する。リサーチの結果、徐々に祖母の日本での経歴が浮かび上がってくる。アサヨは裕福な家庭で育ったこと、愛する男性と結婚し娘2人を産んだものの、嫡子である男子を産めなかったことから離縁させられ二度と夫や娘たちに会うことができなかったことなどが明らかになる。しかし、その事実と祖母アサヨの話とは食い違っている。なぜ祖母は「嘘」をついたのか。映画の前半は、明らかになりはじめた祖母の半生、アサヨ自身の夢と記憶、その背景にある関東大震災や戦前の尾道の映像等を織り交ぜながら、「嘘」の中にあるアサヨの悲しみを美しく描き出す。後半は、リンダらが二人の娘を探し出し、生存していた次女のチエ



リンダ・オーハマ監督

コに会うことに成功するリサーチの様子、祖母アサヨと娘チエコとの感動的な再会を描いている。

この作品は、2001年バンクーバー国際映画祭観客選奨賞ほか数々の賞を受賞している。

リンダ・オーハマ監督の講演

「もう日本を訪れることができない祖母は、私にこの1枚の手紙を託しました。日本でこの映画を見ていただく機会に必ずこの手紙を紹介しています。この手紙には「いつも、どんな時にも私の心の中には日本があります」と書かれています。」アサヨさんの強い望郷の思いが伝わるこの言葉から監督の講演は始まった。以下はその講演の概要である。

この映画で伝えたかったこと

この映画は、「真実」と「記憶」と「夢」が交錯し、最後にそれが一つになるところを描いている。その一つになるところが娘のチエコと祖母の再会の場面であり、映画の中で最も感動的な場面である。私自身も感動し、カメラを回す手がおぼつかなくなった。この映画で、ドラマ（祖母の半生の部分である記憶と夢の部分）とドキュメンタリー（事実の部分）を織り交ぜる手法を使ったのは、記憶と真実が一つになるまで交互に折り重なっていくことを表現したかったからである。

このシーンはまた、100歳の女性が新たな生命を生み出すシーンとしても描かれている。二人が再会を果たしたその瞬間、75年の時を越え、祖母は母の顔になり、チエコは赤ん坊の顔になった。祖母と娘のチエコは3日3晩一緒に過ごし、毎晩同じベットで寝ていたが、100歳の祖母は80歳のチエコを赤ん坊のように抱きしめ寝ていたのである。

祖母の人生

この映画は祖母が75年の間秘密にしていた記憶をもとに作られたものであるが、その記憶は真実とは違っていた。「子どもたちは天皇陛下のところへ預けられた」という祖母の記憶の混乱は、子どもや夫から強引に引き離されてしまったという、つらい記憶から自分を解放するために生じたことだったのではないかと考えている。そもそも、日本から遠く離れたカナダに写真花嫁として来るという選択をしたのもつらいことを忘れるためだったと思われる。

日系社会

2003年にはじめて日本を訪れた時、はじめてとは思えないほど懐かしい感じがした。祖母や母から日本のことをおしえられていたわけでもなく、日本のことをまったく理解もしていなかったのにである。私は、時代を超えて変わらない綿々と流れる日本の文化や伝統が私の中にあるのを確信した。まさに、私たち日系3世、4世自身が日本の変わらない文化や伝統の証拠なのである。

祖母や母たち日系1世・2世は、戦時中の収容所でのつらい経験などがあったため、子どもがカナダ社会に受け入れられることを第一に考えてきた。私も母から日本語をしゃべることを固く禁じられていた。しかし、現在のカナダは多文化社会を形成しているため、差別を受けることもなく子どもたちは自由に日本語をしゃべることができ、何の抵抗もなく日本を受け入れている。

映画づくりと私

私は大学で映画づくりを専門に学んだわけではなかった。弁護士をめざし法学部に入ったが法律に興味はわかず、興味はアートや表現に移っていった。最初は絵を描いていたが、絵画では表現しきれないテーマに出会い、映画という表現手段に魅力を感じるようになった。しかし、法学部に入ったことは決して無駄ではなかった。今回の映画でも、歴史的・社会的背景を当時の記録フィルムを使って描いているが、そうした歴史的・社会的視点は法学部で得たものであるし、私のドキュメンタリーという手法も法学部での経験と結びついていると思っている。

こうして、まったく経験のないまま映画をつくりはじめたのだが、そこで得たことは情熱をもつことの重要性和と多くの人との出会いや助けであった。とくにい



会場の様子

ろいろな方の助けなくしては映画をつくれなかったと痛感している。「The Last Harvest」ではクリント・イーストウッド監督に助けられ、今回の映画では大林宣彦監督にお世話になった。大林監督が見つけてくださった1923年以前の尾道の映像がなかったら、この映画は奥行きのないものになっていただろう。

リンダ・オーハマ監督とフリーライター高野史枝さんのトーク

高野：まずは皆さんが最もお聞きしたいと思っていることをお尋ねします。おばあちゃんはお元気でいらっしゃいますか。

オーハマ：2003年に映画を作り上げ、それを携え来日し、日本の各地で映画上映を行いました。クリスマス直前に日本から帰国し、さっそくその報告をしようとカルガリの老人ホームに祖母を訪ねました。祖母は(当時104歳)、到着した私たちが上映の話や尾道の話をするのをうれしそうに聞き、自分でも気持ちよさそうに歌を口ずさんだりました。しかしその後、様態を急変させ息を引き取りました。祖母はとても満足して人生を終えたと思っています。

私は子どもの頃、祖母からピンク色のスカーフ(日本で子どもが浴衣を着る時に着ける帯)をもらい大切にしていました。そのことから、このスカーフを祖母の映画を撮影する時にいつも身につけていました。日本に最初に来た時も持ってきましたが、祖母の思い出を日本に残しておきたいと思い、このスカーフを尾道においてきました。祖母が亡くなったことを尾道の皆さんに知らせたところ、皆さんは陶器で特別の容器を作ってください、それにスカーフを入れて祖母の両親の眠るお墓に納めてくださいました。尾道の皆さんが祖母を大事に思ってくれていることにとても感謝しています。そのこともあって、今回の来日では、尾道で日本のお盆を迎えたいと思っています。

高野：映画の中であのピンク色のスカーフがとても効果的に使われていましたが、こういう背景を聞いてもう一度映画をみると、また違った面も見えてくるかもしれませんね。次の質問ですが、この映画を見たカナダの観客と日本の観客との間に、反応の違いはありましたか。

オーハマ：基本的なところでは同じだと思います。日本でも、カナダでもこの映画をみて、「アサヨは自分自身だ」という方が何人もいました。この映画が扱っている主題は、女性の人生や母親など普遍的なものですから、国境・民族・文化を越えて共感されたのだと

思います。アートは、映画であれ絵画であれ表現する手段は違って、人間の深いところで共通にもっているもの(価値)を、違いを超えて伝えることができる最も優れた手段だと思っています。

高野：今日は映画にも登場し、監督とともに肉親探しをした、監督の娘さんであるケイトリンさん(16歳)も参加してくださっていますが、ケイトリンさんが映画の中で「おばあちゃんのことを自分の子どもに話してあげたい」と語っていましたが、あれはお母さんが書いた台詞ではなく自分の言葉だったのですか。

ケイトリン：あれはまったく自分自身の言葉です。映画の撮影の間いつも母と一緒にいて、母の映画への思いも自然に自分のものとして受け入れていたからでしょうか、あの言葉は自然に出てきました。私は将来政治家になりたいと思っていますが、私たちが曾祖母・祖母・母たちから受け継いできた文化、教育、プライドなどを、今度は同じように私たちの子どもたちに伝えなければならないと考えています。

高野：日本には監督家協会というのがありますが、その会員500人ほどの中で女性監督はたった15人しかいません。男性中心の映画の世界で、女性が監督としてやっていく困難はありますか。

オーハマ：日本の映画界が男性中心であることは知っています。この間日本で多くの映画関係者にお会いしましたが、確かに高齢の方の中には私を映画監督として受け入れることが難しいと思っている方がいらっしゃいました。男性と比べ女性の方が、受ける困難が多いということはカナダでも同じです。しかし、それを乗り越えなければ前に進まないことも事実です。とくに私たちの世代が困難をどう乗り越えるかに、後に続く女性監督たちの将来がかかっているといえます。

(文責 IGWS 運営委員 石田好江)



リンダー・オーハマ監督と
高野史枝氏によるトーク

記念事業参加感想文

7月12日に愛知淑徳大学星が丘キャンパスにて学園創立100周年・大学30周年記念講義として「おばあちゃんのガーデン」が公開されました。当日は多くの方が出席されて普段は学内の生徒だけしか使用しない教室も学外の人たちで一杯でした。講義を開講する教室には生徒から年配の方までいろんな年代の人がおばあちゃんのガーデンを見に来ていました。私は本学の生徒で学内の掲示でおばあちゃんのガーデンの講演を知り楽しみにしていました。

おばあちゃんのガーデンは、主演アサヨ・ムラカミさん104歳の実体験によるライフライティングをその孫にあたるリンダ・オーハマ監督が撮影をした作品です。1924年に関東大震災の翌年におばあちゃんは写真婚でカナダに渡り、激動の時代を生き8人の子供をもうけました。おばあちゃんが100歳を迎えたある日、孫娘たちに2人の女の子の写真を見せ日本でも一度結婚をして2人の娘がいると告白をしました。驚いた孫娘たちは調査を始め日本でその子供を捜し再会するストーリーでした。

映画が上映された最初のシーンでは英語とおばあちゃんの言葉の2言語が同時に流れていてそんな作品を今まで見たことがなかったのでも驚きました。また私自身が特に注目したのが、おばあちゃんの話す言葉でした。おばあちゃんの話す言葉は片言の日本語

でした。私は、若くしてカナダに嫁いだためか日本語と英語の二カ国語が混ざり合ってしまう日本で生活をしていないため思い出に強く残っている日本語以外はきっと忘れてしまったのだと思いました。しかし、私はおばあちゃんの話す言葉からいろんな苦労や経験をしてきたことをこの講演を見ているだけでも伝わってきました。また、アサヨさんの経験は誰もが経験してきたわけではないと思います。そのため、この作品を作るにあたって辛い過去を話してくださったことはほんとは何よりだったと思うと共にもし孫娘たちに話していなかったらこの作品は存在せず私が見る事もなかったでしょう。100歳を迎えた事をきっかけに話して下さりいろんな意味で本当に感謝をしたいと思います。私はこの作品をみて、人の人生について考えさせられ感動しました。私はこの先どんな人生を歩んで行くのかまだわかりませんがアサヨ・ムラカミさんのように何があろうと前向きに考え環境になじみ生きていけたらいいなと思います。そして、この作品をまだ見ていない人はぜひ一度ご覧いただきたいと思います。

「おばあちゃん のガーデン」

野々山聖子

(本学文化創造学部 3年)

「おばあちゃん のガーデン」を観て

三浦 弘子

100年間自分の秘密を持ちつづけ、そして一世の時を経て運命の再会を果たす道のりを見て、とても感動し、そして人生の奥深さを感じることができた。

自分の人生は、自分で決めるもの。そのあたりまえのことが、出来なかった時代。戦争、そして異国の地での生活。しかし、「おばあちゃん」は「秘密」を抱えていても素敵で楽しく生きていたのだろうということが良くわかった。そしてそんな人生を歩んだからこそ、リンダ・オーハマ監督とめぐり会い、「秘密」を打ち明けることができたのだろう。日本の娘さんと再会を果たしたシーンはとても意味が深くそしてすばらしかった。

そして最後に、私はリンダ・オーハマ監督の「挑戦

することで失うものはない」という言葉にとっても感動した。これからいろいろなことに怖れず突き進んでいこうと、おちこんでいた自分にとっても勇気を与えてくれる言葉であった。情熱をもって生きていくことが大切だとおっしゃっていた。私は、リンダ・オーハマ監督の言葉を忘れずにいきたいと思う。

(本学コミュニケーション学部 卒業生)



「おばあちゃんのガーデン」上映

ジェンダーを意識せぬ世界

真田 幸光

【はじめに】

ジェンダー・女性学研究所より突然の原稿執筆依頼を戴き、驚いている。

私は、慶應義塾大学にて体育会野球部での活動を四年間全うし、その後東京銀行、合併後の東京三菱銀行、更にドイツ系金融機関であるドレスナー銀行を経て大学の教員となった。また、この間日本政府の仕事、地方自治体首長のアドバイザー、民間企業や研究機関の顧問や研究員、マスコミ関係の仕事など、様々な活動をしてきているが、実はジェンダーをあまり意識した社会人生活をしてこなかった。もちろん、こうしたビジネス活動を通じて、「セクシャル・ハラスメントやパワー・ハラスメント」に対する注意を自分自身で怠ったことはない。しかし、それは相手が女性だから、或いは男性だからという「性差や性役割」を背景とした注意というよりも、「相手を1人の人間として尊重する上では当たり前のことである。」から注意してきたまでである。

従って、突然にジェンダー視点を入れて何か原稿を執筆して欲しいとのご依頼を戴いても全く迷うばかりである。しかしながら、今回はビジネスの世界を通じて活躍する女性達の姿とそれを支える仲間達の様子をお伝えすることにより、読者の皆様へ何かのご参考になればと考え、原稿執筆をお引き受けした次第である。以下はそうした内容の文章であるというを踏まえてご覧戴ければ幸いである。

【日本企業社会に未だに残るセクハラ】

ビジネス界で活躍されている女性達とその仲間達のお話をする前に日本の企業社会に未だにセクハラが残っていることを、一言、私の言葉としてお伝えしておきたい。つまり、企業社会の良い面ばかりを示すと、読者の皆様には、むしろ「それは本当なのか？」との疑問が生じるであろう。だからこそ、企業社会に残る課題の一面を先にお伝えしておきたいと考えた。実は先日、私がアドバイスをしている企業が主催する企業間懇親パーティーに、勉強の為に学生達を連れて行ったのであるが、その席上、ある企業の社長が同席した女子学生たちに対して、「君たち、何処に就職したの?」「そうか、その会社か?」「まあ、君たち女性は結婚するまでの腰掛だから、仕事をしながら良い男性を見つけなさい。」と言い、その場を立ち去っていった。学生達、もちろん笑顔で受け答えをしていたが心の中は不満で一杯であったはずである。何故ならば、この社長の態度・発言には、学生達に対する敬意の心が微塵も感じられなかったからである。老若男女にかかわらず、まず相手の敬意を示してお付き合いするのが国際ビジネス社会の常識、こうした行為を採ることができない企業人が残念ながらまだまだ日本の企業社会には存在していることは間違いない。しかし一方、こんな事例もある。外資系企業などに勤める女性社員たちの中には、自らのビジネス能力の高さを基礎にしつつ女性の魅力を前面に押し出し、それなりのファッション・コーディネートをしてビジネス社会で活躍している。彼女達に聞くと、「持てる能力をフル活用してビジネスに成功するのは当たり前のこと。」とさりげと言いのける。実力を基にしつつ性差を巧みに利用したビジネス展開する人もまた間違いなく存在している。日本の企業社会全てがこうした状況ではないということは当然ご理解戴きたい。しかし、こうした状況が存在することもまた事実であるということは認識しておくべきであろう。

【日本の企業社会で活躍する女性たち】

ご高承の通り、最近、日本の企業社会においても、「女性の躍進が際立つ」状況になっていることはここで敢えてご説明をする必要もなかろう。私の一つの仕事の分野であるベンチャー・ビジネスの世界でも女性経営者の活躍が目立つ。また、大企業においても、「女性の感性を生かして新しいビジネス分野を確立したい」といった視点から女性管理職を登用する企業も増えている。私が見るところ、こうした中で自他共に活躍している女性に共通する点は、「気配りやきめ細かい配慮ができ、人間として魅力を発揮していること」ではないかと思う。企業社会はあくまでも結果第一主義であり、「法と倫理観に反しない限界」のところで最大限の収益を求めて皆が切磋琢磨する世界である。そして、今や、そこには老若男女の差は少なくなっている。だからこそ、性差や性役割を、むしろ、「差別化の手段として用い、それを発展の原動力とする」女性達も登場し、それぞれがそれぞれの分野で成功を収めはじめている。そして例えば私が東京三菱銀行から外銀に転ずる際に一緒に転職してきた女性は、現在も外資系企業に勤め、女性らしい気配り、きめ細かい配慮と思いつきの良い判断で昇進をし、当然に年収も邦銀時代を大きく上回るような地位を得ながら大活躍をしている。こうした女性はこれからも更に増えていくものと確信している。

【企業社会で活躍する本学 OG たち】

そして、愛知淑徳学園のOG達も日本社会で活躍を始めている。私が番組作りのお手伝いをしているNHKでは衛星放送ニュースのキャスターとして我がOGが毎日、世界各国、国内のニュースを解説・コメントしているが、彼女はいつも女性らしいきめ細かな視点からの質問や解説を心がけ視聴者から高い評価を受けている。また他のOGは大手金融機関に勤め、地方自治体の民活プロジェクトなどを手がけているが、ここでも利用者である住民の利便性を考えた案件の組成に注力され、全国の民活案件推進においてメイン・プレーヤーとして若いながらもその名をとどろかせている。こうした本学OGたちの活躍は性差・性役割を超えた結果であろう。そして、これからのビジネス世界はジェンダーを意識せぬ世界として更なる国際化時代を迎えていくこととなるのではないかと。

(ビジネス学部 教授)



外銀時代の仲間達と我が大学のOGのキャリアウーマン (右端著者)

ジェンダーと ICT



岡澤 和世

現代若者の不安

強い夏の日差しの中を談笑しながら歩いていくキャンパスの中の若者はスタイルや態度は実に様々である。そうした学生の姿からは純粹さやひたむきさを感じ、度々励まされることがある。だがそれと同時に、何かはっきりしない危うさを感じるの私だけだろうか。間違ってもよいから自分の意思で考える、行動を起こす学生がもっと増えて欲しいと授業を通していつも思う。そのためにも、まず自分の可能性について自信を持ち、そして他人を思いやる人物でなければならないだろう。

2005年7月25、26、27日の3回シリーズで朝日新聞は「決める？ 決めない？ '05 選択考」という特集を組み、現在の若者が失敗を恐れて他人になびく傾向を言及している。自己決定に自己責任。洪水のような情報の中で常に「決める」ことを求められる時代である。しかし現実にはシステム社会での無力感が現代の若者にも蔓延している。その一例がインターネットである。ネットでは自分で考えない、決めない人が明らかに増えているという。これはネット内だけではない。システム化が進む社会の中で、どんな状況でも順応できる汎用性が求められるからである。大阪市立大学の石田佐恵子は「決めることへの根底的な疑い、無力感がムードとして若者の間に漂っている。ネットや携帯電話の存在も、自己決定という作業の意味を根底から覆すおそれがあるのではないかと指摘している。

日本人とフランス人の価値観

フランスの大使館から毎年、年間日誌をもらう。2004年版の日誌の巻頭の挨拶の中で駐日大使は次のように述べている。「日本とフランスは遠くて離れておりますが、多くの価値観を分かち合っていることから極めて緊密な交流関係にあります。両国の国民は社会における共同生活において同じ考え方を持っています。日本人もフランス人も、個人の自由、自己の開化を大切にしようとする一方で、同時にそれらの価値は、わたしたちの社会にとって一体性の基礎をなす連帯と不可分であることを認識しています。さらにわたしたちは、同じ原則をもとにした国際社会を望みます。つまり、文化と生活様式の多様性を尊重し、共同責任と連帯を尊重する社会です。そしてこれが多角主義＝マルチラテラリズムにほかならないと考えます。」私は6月に行われた図書館情報学科のゼミ説明会でゼミのモットーとしてこの言葉を引用した。まさに私が平素から学生に望むことだったのである。個人の自由、自己開花、社会との連帯、そして文化と生活様式の多様性の尊重である。

『ジェンダーと ICT』 報告書

2003年、愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所は科

学研究費補助金を得て『ジェンダーと ICT (情報通信技術)』の全国調査を実施した。この調査を行った動機は性差に見られる不平等や格差の拡大が懸念されたからである。その詳しい結果については既刊の報告書を読んでもらうことにして、ここでは主な結果をジェンダーの視点から考えてみたい。それを踏まえて先に述べた現代日本の若者の不安が日本固有のものであると指摘する。

不平等と不公平の拡大はジェンダーに限った問題ではない。この気持ちは若者にも高齢者にも広がっている。こういう時代だからこそ公平とは何か、公平の配分とは何かについて冷静な論理と客観的なデータに基づく議論が不可欠である。

英国の研究者、Trevor Haywood は著書『インフォ・リッチ; インフォ・プア』の第2章の「情報瞬間」の中で〈ジェンダー・ベンダー〉について述べている。彼によれば、女性はこの情報瞬間から除外されてきたという。英国の調査を基に女性をインフォ・プアにしてしまった社会事情を鋭く批判している。

アムステルダム大学の Valeria Frissen は情報通信技術に囲まれている現代社会状況を電線の張り巡らされた鳥籠に譬え、女性はこの罫にはまった鳥のようだと指摘している。情報通信へのアクセスの仕方もそれらの経験も男女では全く異なるのに、これまでの研究の多くが同じ土俵にいるかのように論じられてきたことを批判している。これらの差を生み出す原因は技術は男のもの、コンピュータは男の玩具という男特有の価値体系に根ざしたもので、その体系は合理的、客観的、競争、昇進という価値から来ている。しかし、女性文化はむしろ情緒的、主観的、親密さ、人への思いやりといった価値に重点が置かれている、女性の社会空間は主として私的領域で、公的領域から排除されている。

上にあげた調査例は膨大な調査の中のたった2例にすぎないが、この他にもこれらの結果を裏付ける調査は多い(報告書参照)。要するに、女性は ICT 社会では生きにくい存在なのである。しかし、今回当研究所が行った調査では、私的な領域、例えば NPO における女性の ICT 利用度は高かったし、女性の多い職場である図書館では有意差がほとんどなかった。確かに、表面的結果を見る限りそうであるように思えるが、実はこの問題は根が深い。これは今回の調査で同時に行なったスウェーデンの調査結果をみれば歴然である。そこには大きな違いがあった。すなわち、国を挙げての性差を越えた情報教育の成果がはっきりと現れていたのである。

今わたしは早くから情報教育を最優先している北欧の国々からそのノウハウを学ぶ必要性を痛感している。同時に日本の若者をスウェーデンの若者のように自信のある市民に育てる責任の重さに押しつぶされそうである。

(文学部 図書館情報学科 教授)

購入図書のご紹介

今年度、以下の図書を購入いたしました。ご利用ください。

タイトル	著者	出版社
地図でみる世界の女性	シーガー・ジョニー	明石書店
女性の自立とエンパワーメント	神谷治美、島田洋子 石田紘子、吉中康子	ミネルヴァ書房
家族とメタファー	丸山 茂	早稲田大学出版部
国際比較：仕事と家族生活の両立	OECD 編集、高木郁朗 (翻訳)、他	明石書店
日本の男女共同参画政策	辻村みよ子、稲葉 馨	東北大学出版社
ジェンダー白書(3) 女性とメディア	北九州市立男女行動参 画センター"ムーブ"	明石書店
男と女の友人主義宣言	佐藤和夫	はるか書房
<男>の未来に希望はあるか	細谷 実	はるか書房
次世代育成支援対策マニュアル	大日向雅美	株式会社 赤ちゃんとママ社
物は言いよう	斎藤美奈子	平凡社
軍事組織とジェンダー 自衛隊の女性たち	佐藤文香	慶応義塾大学
労働のジェンダー化 ゆらぐ労働とアイデンティティ	姫岡とし子他	平凡社
「北京+10」に向けて 進捗と課題	世界女性会議ネットワーク 関西全国シンポジウム 報告書編集委員会編	関西全国シン ポジウム報告 書編集委員会
雇用労働とケアのはざままで 20カ国母子ひとり	マジェラー・キルキー著 渡辺千壽子監訳	ミネルヴァ書房
現代政治と女性政策 双書 ジェンダー分析8	堀江孝司	勁草書房
国際比較 働く父母の生活空間 育児休業と保育所	中田照子編著	御茶ノ水書房
結婚がこわい	香山リカ	講談社
得する女の年金 「損しない女」 になるためのおカネの貯め方、 使い方	吉井佐代子・大山弘子	アスペクト
私、離婚します 妻たちのつぶやき	森本和子	星雲社
もっとことばに出そう！ 自分 の気持ち	森田汐生	すばる舎
学校で教えない性教育の本	河野美香	筑摩書房
シクスティーズの日々 それぞれの定年後	久田 恵	朝日新聞社

タイトル	著者	出版社
憲法 24 条 +9 条なぜ男女平等が ねらわれるのか	中里見博	かもがわ出版
怒りの方法	辛 淑玉	岩波書店
スウェーデンの家族生活	内閣府経済社会総合研究所	家計経済研究所
「公序良俗」に負けなかった女たち	宮地光子	ワーキング・ウイメ ンズ・ネットワーク
華族社会の「家」戦略	森岡清美	吉川弘文館
大卒フリーター問題を考える	居神 浩、三宅義和 遠藤竜馬、他	神戸国際大学経済 文化研究所叢書
パワーハラスメントなんでも相談	金子雅臣	日本評論社
男女共同参画社会	日本学術協力財団	日本学術協力財団
わたし、女性管理職です。	脇田直枝	学陽書房
平成 16 年版 女性労働白書	厚生労働省雇用均等・ 児童家庭局	21 世紀職業財団
女性センターを問う	下村美恵子、辻 智子 内藤和美、矢口悦子	新水社
40 歳からのキャリア戦略	沼波正太郎	新水社
女性管理職が学校を変える	立中幸江	東洋館出版社
思考のフロンティア 法	守中高明	岩波書店
大卒女性の働き方	脇坂 明・富田安信編	日本労働研究機構
女たちのオルタナティブ パートに均等待遇を！	平川景子他	明石書店
季刊前夜(4) (女たち)の現在		前夜(影書房) 出版
ジェンダーと法	辻村みよ子	不磨書房
キャリア人事制度の導入と管理	渡辺 峻	中央経済社
性をしなやかに	小田切明德	かもがわ出版
性はおおらかに	小田切明德	かもがわ出版
性を学び性を生きる	山本直英	かもがわ出版
市場とジェンダー—理論・実証・ 文化	原 伸子	法政大学出版局
グローバリゼーションと社会政策	社会政策学会	法律文化社

学生サークルジェンダー研究会(同好会)

愛知淑徳大学には、ジェンダー研究会(同好会)という学生のサークルがあります。このサークルは、3年前にできました。以前、「モルガウ」というジェンダーサークルがありましたので、2代目ということになります。現在のジェンダー研究会のメンバーは9人です。活動は、毎月2回程です。各自の関心のあるテーマを持ち寄って話し合い、意見交換等昼休みにしています。その積み重ねを6月に「つながれと NAGOYA」で発表しました。「結婚」というテーマで名古屋市の男女共同参画推進アドバイザー“菜の花の会”とディベートのワークショップをしました。その報告書「結婚」は当研究所にありますので、関心のある方は、お問い合わせください。

お知らせ

学園創立 100 周年・
大学開学 30 周年記念講座

10月15日(土)

13:30～16:00 星が丘キャンパス1号館12A(予定)
シンポジウム【ともに生きる社会をめざして】

講師：上野千鶴子氏

(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

渡辺一史氏

(フリーライター「こんな夜更けにバナナかよ」

著者)

高橋啓介氏

(本学医療福祉学部教授)

谷口明広氏

(本学医療福祉学部教授)

21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!! (一般の人も受講できます)

〈2005年度後期〉

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

ジェンダーと社会 I

長久手 後期 金曜 4限

講師 / 國信潤子、生江 明、星山幸子、佐藤 光、林かぐみ

【授業の概要】

この講義は、まずジェンダーとは何かについて解説し、それらが日本社会において、また開発途上国においてどのように現象化しているかを紹介するオムニバス講座である。5名の開発協力の現場で活躍する講師によって日本、フィリピン、トルコ、バングラデシュ、ネパールなどでの現場の開発協力活動を基礎にジェンダー関係の多様性と開発協力におけるジェンダーに敏感な視点とは何かを紹介する。

持続可能な開発、基本的な生活ニーズの確保、参加型開発、地域住民の意識化など、近年の開発論の理論的展開をもとにジェンダー関係の変容を考察する。

【授業計画】

まず、本講座のコーディネーターである國信(本学教授)がジェンダーとは何か、日本社会におけるジェンダー関係の実態、国際開発におけるジェンダー視点の展開について講じる。次に生江明(日本福祉大学教授)による国際統計にみるジェンダー格差の意味を参加型小グループ討議で読み取り、発表、討議する。第三番目の講師は星山幸子(金城学院大学講師)によってトルコ南東部アナトリア地方の縮小女性労働者の生活実態とイスラム農村社会にみるジェンダー規範を紹介する。第四番目の講師はアジア保健研修所(AHI)の佐藤光医師および、林かぐみ研究員によって愛知県日進市にある国際的なNGOであるAHIの活動、つまりアジア諸国で実施されている保健リーダーの参加型学習による医療・保健、ジェンダー平等の促進活動を紹介する。

各講師が3-4回ずつ講義を行うリレー講義である。大半は講義形式である。必要に応じて、小グループ討議、ビデオ視聴なども取り入れる。

【評価方法】

期末レポート、出席状況、履修態度、感想カード内容などの総合評価による。

【テキスト】

資料配布

【参考文献・資料】

開発とジェンダー (田中他 国際開発事業団出版 2001年)

ジェンダーと社会 II

長久手 後期 火曜 4・5限 水曜 2限

講師 / 中島美幸、山下智恵子

【授業の概要】

ジェンダーの観点から文学作品を分析することによって、〈女/男〉の規範がどのようにテキストにおりこまれているかを読み解き、さらにテク

ストがどれほど現実の女と男の生と性を規定してきたかを検証する。

(中島美幸兼任講師) 「女性の表現」の観点から日本文学を歴史的に跡づける。特に近代以降の女性表現については外国の女性文学と比較しつつ読み解いていく。

(山下智恵子兼任講師) 現代の文学作品を中心に、家族、母娘などの人間関係を、ジェンダーの視点から検証する。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 〈ことば〉とジェンダー
- 第3回 〈書く女〉の登場 (1)
- 第4回 〈書く女〉の登場 (2)
- 第5回 女性を描く男性作家のまなざし (1)
- 第6回 女性を描く男性作家のまなざし (2)
- 第7回 母と娘の物語 (1)
- 第8回 母と娘の物語 (2)
- 第9回 家族の物語
- 第10回 文学の政治性
- 第11回 文学と映像文化
- 第12回 まとめ

*内2回は山下智恵子担当。他は中島美幸担当。

【評価方法】

出席状況、毎回の感想、学期末のレポートを総合して評価する。

【テキスト】

なし。随時、プリントを配布する。

【参考文献・資料】

講義の中でその都度紹介する。

女性学・男性学

長久手 後期 水曜 木曜 2・3限

講師 / 中島美幸

【授業の概要】

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格の内部に及ぶ性別化の影響とその結果生まれる病理などについて、さまざまな事例や理論を紹介し検討する。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 女性学・男性学の誕生
- 第3回 男女をめぐる国際比較
- 第4回 作られる「女らしさ」「男らしさ」
- 第5回 恋愛と結婚
- 第6回 リプロダクティブ・ヘルス/ライツ
- 第7回 女性と労働
- 第8回 男性と労働
- 第9回 家族をめぐる諸問題 (1)
- 第10回 家族をめぐる諸問題 (2)
- 第11回 将来展望・男女のライフスタイル
- 第12回 まとめ

【評価方法】

毎回の授業の感想と中間レポート (2~3回)

の内容、さらに学期末テストで総合的に評価する。

【テキスト】

なし。随時、プリントを配布する。

【参考文献・資料】

講義の中でその都度紹介する。

比較文化論

長久手 後期 金曜 3限

講師 / 星山幸子

【授業の概要】

国際化が進み、世界の異文化が日本に入り、日本の文化も世界に伝わるようになった。世界の文化の特徴をあげ、日本の文化との比較を考察しながら、異文化交流についても講義する。

とくに、イスラームの文化を事例として取り上げ、異文化に対する視座について検証する。この授業をとおして、多様な文化や価値観を学ぶことにより自分自身の社会や文化を見つめ直すことを目標とする。

【授業計画】

1. 文化と文明
2. 文化の理解
3. 民族と国家と文化
4. 南北問題と開発途上国の文化
5. 人の移動と異文化接触
6. グローバル化とローカル化
7. イスラームの文化
8. イスラームとジェンダー
9. 文化摩擦と国際問題
10. 中央アジアの人びと
11. トルコの人びとの暮らしと文化
12. 日本社会における異文化交流

【評価方法】

出席、授業中の提出物、討論と質疑応答 30%
期末試験 30%
期末レポート 40%

【テキスト】

テキストは使用しない。授業中に適宜プリントを配布する。

【参考文献・資料】

授業のなかで参考文献リストを配布する。また、ビデオなどの視聴覚資料を使用する。

これらの講座履修・申し込み先

愛知淑徳大学エクステンションセンター

〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘23

受付日時 (月~金) 9:00 ~ 17:00

TEL/052-783-1665(直通)、FAX/052-783-1621(直通)

ホームページアドレス <http://www.aasa.ac.jp>

編集後記

本研究所はこの度ニュースレターの第20号を発行することができました。その第20号は、学園創立100周年・当研究所10周年記念事業の内容を中心に、ビジネスやICTなど新たな角度からジェンダーを考える記事等で構成しております。また、今回はとくに、少しでも読みやすく、見やすくなるよう紙面づくりに配慮しました。今後も更に努力する所存です。どうぞ愛読の程よろしく願いいたします。

ASU・IGWS2005年度

運営委員：石田好江(所長兼)、岡澤和世、
國信潤子、齋藤和志、西和久、
平林美都子

スタッフ：山田清美